

明治前期の町

—上総の場合—

一、はしがき

筆者はさきに「市場集落^①」を著した際、これが町か村かという事を問題にした。続いて一万石大名の城下町について考察した際にもこの中に町と称するのがふさわしくないものが多く混じている事を指摘した^{②③④}。更にこれ等について諸先学の所説を拝読している内に地理学畑の方々は主として景観・機能等その実態に視点が置かれ、法的には町であれ村であれ核心集落としての性格があれば都市として扱われる傾向が強く、史学畑の方々は法的な面に重点が置かれ町という呼称をもつものを都市と扱われる傾向が感じられたのである。

本稿の意図はこの両者を関連づけて考察したいという点にある。いいかえればどのような系譜・機能・規模のものが町として扱われたかを検討しようというのである。対象の時代は明治前期としたがこれは明治二十二年の町村制施行以前の意味に使った。この時期は試行錯誤的な過渡期であり、前代の呼称が惰性的に使われている場合が多いのでこれが考察には必然的に藩政時代の事が問題になるし、町村制施行以後に言及する事もある。

近時明治期の都市や村落を研究された多くの業績に接するも、前者においては市制（その前には区制）を施した程度の都市が、後者においては農村（又は漁村）が主として扱われ、その中間ともいふべきもの―町村を施いたり施かなかったりの程度のもの、についての業績が僅少な事も本小考を企図した理由の一つである。

二、資料と対象地域

主たる資料として「上総町村誌」を使用した。明治二十二年七月の刊行、和綴で郡ごとにまとめ六冊本（郡の数は九、小郡は二郡で一冊）である。著者小沢治郎左衛門については経歴その他明らかでないが、内容を通読するに良心的な著述と思われ、特に小稿の主題たる町か村かといった事に深い関心を持っていたごとく、村以外の呼称をもっている場合や呼称の変更があった場合については当時として可能な限りその理由なり、変更の時期なりにつき調査して記載している。民間の刊行物であるが研究資料として相当の信頼を置いて利用できると思われる。凡例によれば戸数・人口・牛馬・舟車等は明治十九年度の調査によるとある。本書は旧村ごとの記述でほぼ完成していた際に新町村制が施行されたので本文はそのままとし、各郡の始めに新旧町村名の対照表を加えて刊行している。この事も小考を行うには好都合であった。

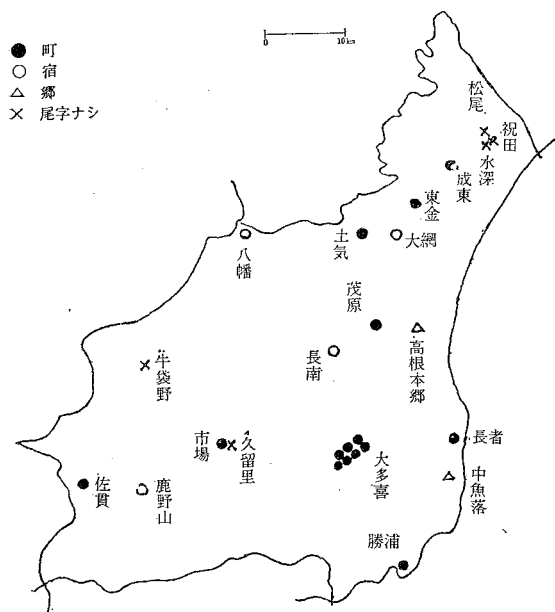
対象地域たる上総は資料の便宜より選んだわけであるが、城下町―藩の指定した何ヶ所かの在町―村といった階層性のはっきりしている旧大藩領の地域と異なり小藩分立地域の事例として興味ある状況の一端が明らかになった。事情の違う他地域との比較考察は今後の課題である。

第 1 表

郡	町	宿	郷	村	新田	尾字ナシ	計
市原		1		169	2		172
望陀	1			135		2	138
周准		1		92	1		94
天羽	1			49	1		51
上壇生		1		43			44
長柄	1		1	119	2		123
山辺	2	1		118	1		122
武射	1			111	4	3	119
夷隅	9		1	157			167
計	15	4	2	993	11	5	1030

町村等の尾称別に郡ごとに整理して第一表を得た。またこの内、村・新田以外のものの位置と名称を第一図に示す。町・宿・郷・村・新田・尾称なしの六種類がある。本稿の課題としては村・新田以外が問題となり、次項以下で取り上げるが、これに先だち村と新田についても一言して置く。

三、尾称の種類



第 1 図

第2表 村の規模

郡市望周天上長山武夷計%	原陀	准	羽	殖	柄	辺	射	隅	計	%	
50未満	97	64	50	18	18	50	58	60	67	482	48.5
50～99	42	46	34	16	14	31	35	29	37	284	28.6
100～199	22	18	5	9	9	31	16	16	44	170	17.1
200～299	6	4	2	3	2	3	4	3	7	34	3.4
300～499	1	2		2		2	4	2	2	15	1.5
500～999	1		1	1		2	1	1		7	0.7
1000以上		1								1	0.1
計	169	135	92	49	43	119	118	111	157	993	100
最多	五井 704	木更津 1030	富津 718	竹岡 535	芝原 290	一本 宮郷 816	片貝 998	蓮沼 758	山田 335	木更津 1030	
最少	小折 10	栗坪・ 竹原 9	中島 12	田一色 8	竹林 24	小萱場 3	東中島 3	宮崎 4	小又井 6	小萱場 中島 3	

上総では「浦」の称がない。漁村も農村と同じく「村」である。土佐では農村部とは別に漁村部だけが別の行政域「浦」を作るためその戸数は一般に内陸部のものより少い^⑥との事であるが、上総では漁村部が隣接の農村部と共に「村」を形成するためか臨海村に戸数の多い村が多い。

第二表は他の尾称のものを除き、村だけにつき郡別及び規模別に整理したものであるが、九郡中上殖生・夷隅両郡を除く七郡の最多戸数の村が臨海村である。九十九里浜の納屋集落は親村に含まれて一つの村としては扱われず、「納屋」という尾称はない。半数近く（四八・五％）が五十戸未満の小村であった事と最大一〇三〇戸、最小三戸と村の規模に大差がある事も第二表により特記したい点である。

「新田」というのは「……新田」というもののみを取り、「……新田村」というのは「村」に入れたから、いわゆる新田の全数を示すわけではない。十一例中耕地だけで家のないのが二例ある。「……新田」と「……新田村」の差違がどのような事情（条件）で生れるかも問題と思うが今回は考察しなかつた。

四、郷

土佐では吉野川上流の山間地方に「郷」があり^⑥、他に白川郷・十津川郷のごとく一般に山間部における中世的呼称の遺存として説かれているが上総ではどうか。

上総には高根本郷（長柄郷）と中魚落郷（夷隅郷）の二つがあった。前者は九十九里平野にあり、「里伝ニ云フ本郷ノ旧記皆村ノ尾字ヲ附セス今之ニ由ル^⑦」とあり、宝曆十一年の明細帳^⑧にも「高根本郷」とある。この明細帳の記述によればごく普通の農村であつて町的な性格は認められない。後者は大原を中心とする地域で「市街、字大原ノ部落市井ヲ為ス、警察分署アリ^⑨」の記載はより当時大原はかなりの町場を作つていた事がわかる。後者は海岸に臨み、前者も海に近い。中世的呼称の遺存かどうか疑わしい所である。後者の戸数一〇三三戸は上総全部（町・村等全部）を通じて最多であり、前者の戸数（二二七戸）も多い方である。都市的であり人口密度が大きいからというのではなく面積が大きいのである。どうしてこの二ヶ所だけ広域的な郷というものになつたのか問題である。

五、尾字なし

町とか村とかの尾称を附さないもので五例ある。その一つ牛袋野（望陀郡）は木更津の北東約四料、小櫃川の沖積平野にある（五万分一地形図木更津参照）。「モト坂戸市場村ノ野地タリ、寛文六年丙午開墾シ、延宝五年丁巳始メテ検地ヲ受ケ、天保六年乙未分レテ本称ヲ附ス^⑩」とあるから新田の同類である。

他の四例は城下の土族居住地関係という共通性をもつ。久留里（望陀郡、戸数一七一、人口七五〇）は「モト久留

里城郭ノ地タリ、明治四年辛未廢藩ノ後一村落ト為スト雖モ町村ノ尾字ヲ附セス^⑧とある。今の久留里駅前^⑨の市街地が久留里城（黒田氏二万石）の城下町だった所で当時は「市場町」といった。駅の東南一五〇〇米、一七九米の三角点西の一二〇米閉曲線の所（五万分一地形図大多喜参照）が城跡でその西麓地形図で水田になっている所が藩士の居住地だった所、即ち町村の尾字をつけなかった久留里の地である。

明治元年十一月遠州掛川城主五万石太田資美、封を上総に移されしばらく芝山に在住し芝山藩と称した^⑩、が居館落成と共にこれに移り松尾藩と改称した。明治四年廢藩後藩庁跡を松尾、藩主邸地跡を祝田、藩士邸地を水深と称したがこれ等には町・村の尾字をつけなかった。

もともと藩士の居住地は今の人が考えるように城下町の一部とはみなされていなかった。もちろん村ではない。それが墨濠内（松本氏の内山下^⑪）であつてもなくてもむしろ城郭の一部のごとくに考えられていたのではなからうか。廢藩後これをどう扱うかに苦慮したに違いない。町人居住地同様に町とする事も農村同様に村とする事も士族にとっては快くなかつたろう。尾字なしとはその為とられた苦肉の策であらう。

大多喜（大河内氏二万七千石余）では城下の七ヶ町に対し士族屋敷は大多喜村と称した。佐貫（阿部氏一万六千石）では明治六年に城址を佐貫町に合併したとあるがこの城址とは城だけでなく藩士居住地を含むものと思われ、明治六年以前にはここも尾字なしだったかと思う。他の上総の諸藩では士庶の別なく一村を形成した。

他地方の例を拾うと武州の岩槻（大岡氏二万三千石）では太田町（城郭と藩士居住地）と岩槻町（城下町）、忍（松平氏十萬石）では成田町（城郭と藩士居住地）と行田町（城下町）に分れていたが、町村制施行に当り合併して岩槻町・忍町になった。城郭・藩士居住地の町名を定めるに当って最初の築城者の姓を（廢藩時の藩主でなく）附した点

第3表 町村制以前の町

町	郡	戸	口	牛	馬	舟	荷車	荷馬車	馬車	人力車		
市	場	町	望陀	282	1182	0	4	9	5	0	0	5
佐	貫	町	天羽	181	1037	15	8	0	7	0	0	7
茂	原	町	長柄	469	2303	0	11	0	61	8	0	24
土	気	町	山辺	144	740	0	81	0	0	0	0	0
東	金	町	"	521	2786	1	28	0	67	0	9	37
成	東	町	武射	259	1183	5	28	8	9	0	0	9
勝	浦	町	夷隅	255	1397	0	1	19	16	0	0	1
大 多 喜	柳 新 桜 久 猿 田 紺	原	"	47	233	0	1	5	0	0	0	1
		台	"	94	485	0	0	0	3	0	0	0
		保	"	69	312	0	0	0	3	0	0	1
		稲	"	67	328	0	1	0	3	0	0	2
		屋	"	86	415	0	2	5	0	0	0	2
		屋	"	29	171	0	2	4	0	0	0	0
		屋	"	54	248	0	0	0	3	0	0	1
(大 多 喜 七 町 計)			446	2192	0	6	14	12	0	0	7	
長	者	町	夷隅	206	897	0	3	7	5	0	0	0

が興味深い。越後の長岡本町と長岡町、高城村と高田町、村上本町と村上町は町村制施行後も続いた。

六、町

第三表のごとく十五の町があった。このうち市場町（久留里）と佐貫と大多喜の七ヶ町は近世を通じての城下町だった。注意すべきは大多喜城下の部分城としての七つの町が他の独立の町と同様に扱われている事である。他の資料^⑤により各地の状況を見ると大多喜の場合が特殊だったのでなくむしろこの方が普通だった事が知られる。町村制施行以前に一ヶ町にまとまっていたものに松代・沼田・伊勢崎・二本松・平・白河・三春・人吉・八代・新宮・島原・諫早・平戸等があるがむしろ少数であり、大部分の都市は多数の町の群体の形で町村制施行時まで続いたし、町村制施行の遅れた対馬や隠岐では明治三十二年の時点においても厳原や西郷はその状態であった。これは藩政時代における取り扱いが維新後

踏襲されていたからであり、藩政時代には城下町等の部分域としての町と在町が同じ扱いだっただのである。現今地方自治体としての市・町・村の一つたる町と都市の部分域で何等の権能をもたない町が共に「町」の名で呼ばれる起原もここに求められねばならない。町村制施行前から一ヶ町だったものはごく小さいものを除き維新後町村制施行時までに町村合併を行った地方のものである。前述の岩槻は町村制施行時に岩槻・太田二町が合併しているが、旧岩槻町は明治八年に九町二新田が合併したものである^⑧。合併するかどうかは必ずしも県ごとに一定していたわけではない。和歌山県で新宮が一ヶ町になっていたのに田辺は多数の町のままだった。

これより想起されるのは郡区町村編成法による区である。明治十八年に三十七の区があり^⑨、うち二十一は東京・大阪・京都の大都市内部分域としての区で今の区に続くものであり、他の十六は名古屋・仙台等の都市を区としたもので後の市に相当する。このような性格の異なるものを同一に扱う区制が生れた背景には前述の当時の町の姿があったのではなからうか。

土気・東金・成東の三町は戦国期の城下町である。土気と東金は酒井氏、成東は千葉氏の居城があり、いずれも天正十八年に落城している。成東にはその後も元和六年まで大名（石川・青山両氏、二万石）が住み、元禄十三年から明治四年まで結城藩主水野氏の陣屋があった。東金には家康が遊獵のための御殿を作り、寛文十一年まで続いた。宝暦十年の明細帳^⑩には「慶長十九年甲寅御成之節より東金町と唱申候」とある。

長者町は市場町として計画的に設定され、寛文二年より開市されたものでその成立事情は川村 優・海保四郎両氏の論文^⑪に詳しい。その当初より町とされている。所でこの附近で定期市が立っていたのはここだけではなく、御宿・大原・国吉・大東・一ノ宮・茂原・本納等があり、その多くは今も六斎市が立っている^⑫。しかるに長者町のみが

町だった点を指摘したい。茂原は「居民概ネ商ヲ営ム、毎月六回市ヲ開ク、而シテ町ハ郡ノ中央ニ位シ商売ノ便アリ、故ニ開市ノ盛大ナルコト本州ニ冠タリ」の状況であったが近世には村であり、明治初頭に駅となり、明治十四年六月に村に復し、同年十一月町になった。

勝浦は商業と漁業の町で毎日市が立ち、慶長六年の水帳に既に勝浦町と記されていたとある。

七、宿 と 駅

宿と称したのは八幡（市原郡）・鹿野山（周准郡）・長南（上埴生郡）・大網（山辺郡）の四ヶ所である。この内八幡は明治元年、大網は同二年、長南も維新後に宿になったというから近世以来の宿は鹿野山だけである。

鹿野山については村松繁樹氏の論文^⑧が詳しい。神野寺の門前町であり、近年は観光集落の色彩がこいが、近世には江戸より木更津に渡り、房州に至る道の宿駅だったという。

もともと上総には五街道等の本街道が通っていないから正規の宿駅はないがローカルな街道の人馬継立をしていた所なら多数あって大部分は村であった。鹿野山以外の三ヶ所はいづれも実質的に町場をなし、都市度（後述）の高かった所だが何故に町に（茂原のごとく）せずに宿にしたか明らかでない。八幡は東京行の汽船が寄港し、上総で唯一の国立銀行^⑨があり、市が立っていた。天保九年には家数三三五軒の内、農間商い並びに諸職人が一二八軒を数えた^⑩。長南は近世には矢貫村と称し、天明頃に近村の者達が「埴生郡中、外ニ市場無之殊更最奇ニ付、私共村々矢貫村え一ヶ月六度宛罷出候間、諸事親郷と心得^⑪」ているような所であった。戦国期には武田氏の長南城があったが天正十八年に落城している。大網には明治二年に出羽の長瀬藩（米津氏、一万一千石）が移封して来たが同四年に竜ヶ

第4表 上総の諸藩と城下町

藩	前封地	藩主	本高 (千石)	士族屋敷	城下町
久留里(城)	—	黒田	30	久留里	市場町
大多喜(城)	—	大河内	27余	大多喜村	大多喜七ヶ町
飯野(陣屋)	—	保科	20	下飯野村	
佐貫(城)	—	阿部	16	佐貫町	
鶴牧(陣屋)	—	水野	15	椎津村	
一宮(陣屋)	—	加納	13	一宮本郷村	
鶴舞	明治元年移封	井上	60	鶴舞村	
松尾		松川太田	50	松尾(藩庁)祝田(藩主邸)水深(藩士邸)	
菊間		津水野	50	菊間村	
小久保		良田	10	小久保村	
桜井		濱掛沼相小島	10	貝淵村(藩庁)桜井村(邸宅)	

崎に移った。短期間の在住で寺院(蓮照寺)を藩庁に仮用していた⁶⁰位だから尾称の変更には関係なさそうである。
茂原(前述)のほか本納・六地藏・長柄山の三者が明治初年に駅となったが同十四年六月に村に復している。これ等も数ある人馬継立地の一部にすぎない。

八、城下町・県庁等との関係

第四表のごとく、廃藩時に上総には十一の藩があったが、そのうち城下町が町だったのは久留里・大多喜・佐貫の三藩で藩士居住地を維新後尾字なしとしたのが松尾・久留里両藩で他の七藩は村である。近世都市の代表城下町という常識よりすれば意外という所である。明治元年に駿遠地方より移封した五藩を除いた六藩についてみると城の三藩が町で陣屋の三藩が村であって両者の別と一致する。文字通り城下町である。石高との関係を見ると二万石の飯野が村で一万六千石の佐貫が町である。現地を見ると飯野では陣屋は壮大な遺構(土塁・水濠)を残している(五万分一地形図富津には御屋敷と記されている。青堀駅の南一軒)が町らしきものがあつた形跡はない。古絵図の写真⁶¹を見ても同様であ

第5表 大区扱所と郡役所

大区	郡名	大区扱所	小区数	郡名	郡役所
3	天羽・周准	佐貫(町)	13	君津	木更津(村)
4		木更津(村)	12		
5	市原	八幡(宿)	14	市原	千葉(町)
6		大多喜久保(町)	19		
7	埴生・長柄	本納(村)	16	長生	茂原(町)
8			山辺・武射		
9	同上	松尾	11	山武	東金(町)

る。佐貫の場合は小規模ながら町場をなしている。古絵図[㊦]と対照すると北方木更津よりの道が直角に西に折れる所(地形図の水準点の所)に高札場があり、以西は町屋だった。東に折れると喰違御門があり、入ると藩士の居宅が並び大手門の前に及んでいた。城跡は荒廢甚だしく古絵図の写を携行し古老印東氏の同道指導を得なければそれと理解し得ぬ程である。佐貫が小藩にかかわらずまともな城下町を持っていたのは阿部氏の前の城主が高禄だった為らしい。柳沢氏で元禄六年に六万二千石余を領し、翌年七万二千石余で川越に移っている。一万六千石の阿部氏には城が大きすぎ、本丸・二の丸を封鎖して三の丸だけを使っていたという。

明治元年に移封した藩においては短期間の存在だったとはいえ、小久保・桜井両藩のごとき小藩(各一万石)だけでなく六万石の鶴舞や五万石の菊間でさえ村だった事が注目される。鶴舞では本格的な町作りが行われ、都市度(後述)も低くない。

廃藩直後旧藩をそのまま県としたのを別として上総には明治二年より四年まで宮谷県、同年より六年まで木更津県(県庁は木更津でなく隣の貝淵村にあった[㊧])があったが庁所在地が町になる事はなかった。宮谷県のごとき寺院(本国寺、大網駅の北一軒、五万分一地形図東金参照)を庁舎に

仮用している位だから当然ともいえるが。

大区小区制時代（明治十年現在^⑧）の大区扱所と後の郡役所所在地を表示すれば第五表のごとくである。

大区扱所所在地は町二・宿一・尾字なし・村二であり、郡役所所在地五ヶ所の内、四ヶ所は町村以前よりの町、他の一ヶ所（木更津）も町村制施行時に町になっている。大区扱所所在地だった所で郡役所の置かれなかった佐貫・八幡宿・本納・松尾はいずれもその後町勢が停滞している。

初期には戦国期に城下町だった所が町だったり、御殿を置いた所を町にしたり、他地方の例だが代官所を置いた所（武州高麗郡高麗本郷）が町と称したりしたが、後年には大名の陣屋を置いても県庁を置いても村のままという傾向を指摘したい。

九、都市度との関係

系譜のほかに実態（町らしさの程度）を幾つかの指標につき評価してみた。第六表に配点、第七表に結果を示し都

第6表 都市度配点表

荷車50以上 人力車50以上 戸数1000以上 警察署 郡役所 4等郵便局	各2点
荷車10以上 人力車10以上 戸数300以上 警察分署 郡役所出張所 5等郵便局 国立銀行 定期市 汽船寄港	各1点

市度と呼ぶ事にした。

港町として栄えた木更津が最高点を得ているが、ここは当時村であり、町村制施行時に町になった。村で上位に並ぶのは加納氏一万石の城下で定期市を持つ一宮本郷、「町場にて房州より江戸上総の方へ之往還馬次之村」で造酒家六軒あり、天保十三年まで有馬氏一万石の居所だった五井、「村ハ小市街タリ

第7表 都市度

	郡	都市度	町村制				
			前	後			
木茂東八大一五姉大長勝中本鶴蓮	更 多 宮 本 ケ 魚	津原	望長	陀柄	12	村	町
		金幡	山市	長辺	10	町	町
		喜郷	市夷	原隅	10	町	町
		井崎	長市	柄原	9	宿	村
		網崎	市山	原辺	8	七町	町
		南浦	上埴	生隅	6	村	村
		落納	夷夷	隅柄	6	村	村
		舞沼	長市	武射	6	村	村
			東貫	武天	6	村	村
			山周	山周	5	宿	町
			山周	山周	5	宿	町
			山周	山周	4	郷	村
			山周	山周	4	郷	村
			山周	山周	4	郷	村
	山周	山周	4	郷	村		
成佐鹿土	野	東貫	武天	射羽	1	町	町
		山周	山周	山周	1	町	村
		山周	山周	山周	1	宿	村
		山周	山周	山周	0	町	町

第8表 町村制施行時の町

町	郡	合併町村
木更津	津里	木更津村ほか2村
久留	留里	市場町・久留里ほか12村
湊	天羽	湊村ほか5村
大多喜	夷隅	大多喜7町ほか5村
大旭	夷隅	長者町ほか4村
茂原	長柄	茂原町ほか11村
帆船	長柄	本納村ほか4村
土気本郷	山辺	土気町ほか9村
大網	山辺	大網宿ほか1村
大東	金山	東金町ほか7村
成	武射	成東町ほか9村

東京湾ニ瀬ス船便アリ多ク貨物ヲ輸送ス^⑧という姉ヶ崎であった。一方町や宿で都市度の低いのに成東・佐貫・鹿野山があり、戦国期に城下町だったというだけの土気のごときは得点なしという状況でありながら町村制施行時にも町となり現在に及んでいる。

明治二十二年の町村制施行時に町になったのは第八表のごとく、十一町のうち宿より町になったもの一(大網)、村より町になったもの三(木更津・湊・帆船)があった。湊は湊川の河口港、上流より搬出する薪・竹・木等に十分一の税を課す役所があった^⑨。帆船は本納で^⑩定期市が立ち都市度四となっている。反対に旧来の町又は宿で村となっ

たものに佐貫・勝浦・八幡・鹿野山・長南がある。

七、むすび

町村制施行以前の上総につき町等の系譜をしらべ、町と村の外に新田・郷・宿・尾字なしと種々の尾称があり近世のそれが未整理のまま残る過渡期の姿を示すこと、近世初頭には城等があれば容易に町にしたが後には相応の町場になつていても村のままであった事、一度町になったものは実態をとまわなくなつても根強く町として存続している事、都市の部分域を指す町と小市街を指す町が区別されずにいた事等を知り得たが、得る所少く問題提起に終つた感がある。多くの事例を比較考究して問題の解決に近づきたいと考えている。

町だからといって村とどういふ差違(利点)があるというのかとの声も耳にしている。実質的には差違はなかつたといつてよい。市の場合でさえ町との差違は枝葉の事項が二・三あるにすぎない^⑧という。しかし自己の住所が村よりは町でありたいとは住民一般の心情であり、この心理的なものを考える時、やはり本考の課題は取り上げる意義があると信ずるものである。

本稿の大意は昭和四十三年十一月三日、人文地理学会大会で発表した。

注

- ① 拙著「市場集落」昭和三十九年
- ② 拙稿「一万石大名の城町下、第一報」(新地理一〇巻二号)
- ③ 拙稿「一万石大名の城下町、第三報」(新地理一三巻一・三号)

- ④ 拙稿「一万石大名の城下町についての一、二の資料」(歴史地理学紀要九号)
 山崎修「土佐における藩政村の形態と規模」(小牧実繁先生古稀記念論文集)
- ⑤ 山崎修 前掲論文⑤
- ⑥ 上総町村誌、長柄郡三九頁
- ⑦ 上総町村誌、長柄郡三九頁
- ⑧ 高根本郷明細帳、宝暦十一年(千葉県史料近世篇上総国上所収)
- ⑨ 上総町村誌、夷隅郡六五頁
- ⑩ 同右、望陀郡八頁
- ⑪ 同右、望陀郡三一頁
- ⑫ 山武郡教育会「山武郡郷土誌」大正五年
- ⑬ 松本豊寿「城下町の歴史地理学的研究」昭和四十二年
- ⑭ 武蔵国郡村誌、埼玉郡の部
- ⑮ 大日本三府一庁四十三県新旧対照市町村一覽、明治三十二年訂正版
 前掲書⑭
- ⑯ 浅井得一「日本の市の増加、特に城下町の市制施行について」(新地理六卷三・四号)
- ⑰ 東金町明細帳、宝暦十年(千葉県史料近世篇上総国上所収)
- ⑱ 川村優・海保四郎「近世初頭東上総における在方町成立の一事例」(封建都市の諸問題)
 拙著 前掲①
- ⑳ 上総町村誌、長柄郡二三頁
- ㉑ 村松繁樹「鹿野山宿について」(地理と経済一卷四・五号)
- ㉒ 第四十七国立銀行、資本金九万五千円、代表水野忠敬(最後の菊間藩主)宮武外骨「府藩県制史」昭和十六年
- ㉓ 農間商渡世取調之儀に付八幡村外拾四箇村組合書上帳、天保九年(千葉県史料近世篇上総国下所収)
- ㉔ 矢貫村万控帳、天明八年(千葉県史料近世篇上総国上所収)
- ㉕ 山武郡町村会「山武地方誌」昭和三十年

- ②7 千葉県君津郡教育会「千葉県君津郡誌上巻」昭和二年 口絵写真
- ②8 印東庸行氏（佐貫在住）蔵、年代不明
- ②9 印東庸行氏談
- ③0 貝淵藩（林氏一万石）・桜井藩（滝脇氏一万石）の藩庁跡を利用した。拙稿（前掲③）に地形図を掲げ位置を示してある。
- ③1 小沢直人「千葉県治全図」明治十年 附表
- ③2 拙著 前掲①
- ③3 五井村村鑑明細帳、年度不明（千葉県史料近世篇上総国下所収）
- ③4 上総町村誌、市原郡六九頁
- ③5 湊十分一取立由緒書、明治四年（千葉県史料近世篇上総国下所収）
- ③6 明治三十九年本納町となった。本納町社会教育委員会「本納町史」昭和三十年
- ③7 浅井得一 前掲論文⑱

本小論を明春御退官の恩師岩田孝三先生に捧げ、多年の御指導を拝謝し、御健康をお祈り致します。